
共通語としてのコア(Lingua Franca Core)を考える

——日本語母語話者における英語の歯摩擦音の代替音素——

藤原 愛

はじめに

日本の外国語教育がコミュニケーションを重視したものとなって久しいが、中学・高校の6年間に教科としての外国語(英語)を学んで来た学習者は実際のところコミュニケーションをはかるのに十分な語学能力を身につけているのであろうか。藤原(2014)では日本の大学生が外国語の必要性を認識し、また異文化との接触機会を望んでいるにもかかわらず、現実としては外国語を使用したコミュニケーションの場がないために、実践的な学習ができていない現状が明らかとなった。

本稿では日本の学習者の多くが学んでいる外国語である英語について、コミュニケーションのための英語という観点から、その効果的な学習および指導法を探る第一歩として、Jenkins(2000)が提唱したLingua Franca Core(LFC)に基づき、日本語母語話者が習得に困難を感じる歯摩擦音について、正確な発音ができているか、またできない場合の代替音素にどのようなものがあるか、その頻度について調査する。そのうえで、今後の日本における発音教育のあり方について、ELF(English as a Lingua Franca)の観点から考察していく。

1. 発音教育の背景

これまでの日本における外国語の発音教育は20世紀後半にコミュニケーションアプローチが出現して以来、「話された言葉(spoken language)」を重視したものへと流れを変えてきた。発音教育もそれまでの文脈を無視した反復学習である伝統的なドリル学習を離れ、よりコミュニケーションな活動の中で教えるべきであるという考えが提唱されている(Setter and Jenkins, 2005; Wei, 2006)。

外国語教育では発音におけるsegmentalな要素(個々の音素)を教えることは、言語学習の初期段階で非常に重要であるが、コミュニケーションな活動が重視されるとともに、最も基本的かつ広く行われてきた発音練習であるミニマルペアを用いた練習は、その単調さや文脈を無視した手法のため批判にさらされることもある。しかしながら、Boku(1988)は「ミニマルペアの練習をする際に実際の文脈の中に組み込ん

で指導することが大切である」とし、ミニマルペア自体の練習を否定するのではなく、その扱い方が問題となっていることを指摘している。実際にミニマルペアを用いた発音指導の効果を報告する調査もあり (Lambacher, martens, Kakehi, Marrashinghe & Molholt, 2005)。音素レベルの習得に関わる指導の重要性は明らかである。

一方でコミュニカティブな観点から、先に述べたミニマルペアのような音素の聞き分けに重点を置くのではなく supra-segmental (超分節的) な要素に着目する研究がある。韻律 (prosody) を取り扱うことを唱えている研究 (Eskenazi, 1999) や、超分節的要素が学習者のパフォーマンスを向上させるとする研究 (e.g., Barrera, 2004) もある。Otlowski (1998) は、発音を音素の正しい生成以上のものとして捉えなければならないとし、コミュニケーションを成り立たせるために不可欠な文法や統語、談話と同じ見方で捉えるべきだと主張している。

このことから、コミュニケーションのための外国語教育では、個々の音素の学習はもちろんのこと supra-segmental の要素も取り入れ、文脈があるうえでの発音練習を確立していくことが望ましいと考えられる。

2. 共通語としての英語

英語習得における環境別の分類として、ENL (English as a native language), ESL (English as a second language), EFL (English as a foreign language) という概念があるが、Kirkpatrick (2007) はこの分類の問題点として、native language という言葉が誤解を招きやすいことを挙げている。ENL の国や地域では多様な英語が話されており、すべての母語話者があるひとつの「標準英語」を話しているわけではないからである。

英語の多様性を表すモデルとして、Braj B Kachru は世界英語 (World Englishes) の Three Circles Model を提唱した (図 1)。Inner Circle は英語を母語とする主な地域 (イギリス, アメリカなど) で、英語の伝統的, 文化的, 言語的基礎となっている地域である。Outer Circle は国内で英語を第二言語として使用する地域 (シンガポール, インドなど) で、植民地を経験してきた地域でもあり、現在もその多言語環境のもとで英語が第二言語として重要な役割を担っている。Expanding Circle は外国語

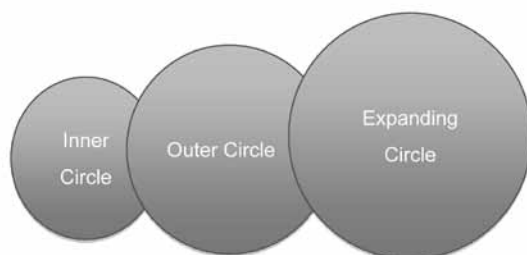


図 1. Kachru の circle model

として英語を学習する地域 (日本, 中国など) となっている。このモデルの画期的な点は英語という単語が複数形で示される (World Englishes) ように, 英語という言語が多文化的な背景を持つものであると示していることにある。

1980年代以降の Communicative Approach の出現により, 日本における英語教育も Inner Circle をターゲットとしたものから, Expanding Circle をもターゲットとした英語へと変化していった。さらに Jenkins (2000) による English as a Lingua Franca (ELF) の提唱により, 発音に関して言えば, いかにかにアメリカ英語 (GA) やイギリス英語 (RP) といったネイティブの正しい (correct) 発音を習得するかというものから, ELF の発音のあり方へと議論が移りつつある。つまり発音教育は「正しい発音」から「明瞭性 (intelligibility)」重視へと変化しつつある。

3. Lingua Franca Core (LFC)

ELF の発音とはどのようなものかについて, Jenkins (2007) は Lingua Franca Core (LFC) という基準を提唱している。intelligibility (明瞭性) を伴った国際英語の発音として LFC は以下の領域を挙げている: (1) 個々の子音音素 (/θ/, /ð/, [ɹ] などをのぞく), (2) 子音連続, (3) 長母音と短母音の対立, (4) 核強勢 (nuclear stress)。それ以外の項目については (母語話者の発話に特徴的に見られるものであっても), 必ずしも教える必要はないとしている。

LFC に基づいた Expanding Circle 間でのコミュニケーションを前提とした研究としては, Deterding (2010) が中国語母語話者の英語についての研究の中で, 東アジア圏ではおそらく「文末の代名詞への強勢 (stress)」は intelligibility に影響を及ぼさないと述べている。また, Kashiwagi and Snyder (2010) では日本人の大学生を被験者とし, アメリカ人と日本人 (アメリカ在住) を聞き手とする intelligibility の調査を行っており, 日本語母語話者の母音の発音は子音の発音よりも intelligibility に影響を与えることが明らかとなっている。さらに Kashiwagi and Snyder (2014) では Expanding Circle 間のコミュニケーションに示唆を与えるものとして, 日本人の母音の発音の間違いが, 中国語母語話者の intelligibility に影響する研究結果を示している。これらの研究は, とりわけ文化的交流やビジネス上での係わり合いが重要となっている日本とアジア (例: 中国語文化圏, 韓国語文化圏) での英語によるコミュニケーションについての示唆に富んでいるといえる。今後 Expanding Circle 間での交流はビジネスや学術においてより重要となることから, ELF の intelligibility についてさらなる具体的な研究が必要であり, LFC について個々の検討が求められる。

4. 英語学習者の歯摩擦音の発音

LFC では英語の歯摩擦音 (/θ/, /ð/) は, 習得の重要性が低い項目としてあげられているが, 歯摩擦音についての研究が後を絶つことはない。歯摩擦音が英語の中では頻度が高く, 特徴的である一方で, この音素を備えている言語が少ないことによる

と考えられる。“*Gimson’s Pronunciation of English*”で「歯摩擦音 (/θ/, /ð/) を持たない母語を持つ英語学習者がほとんどである（アラビア語とヨーロッパで話されるスペイン語はこの音を持つ）」としていることから、Outer Circle および Expanding Circle の多くの話者にとってこの音はなじみがないこととなる。LFC では歯摩擦音 (/θ/, /ð/) が容認される場合として、主に歯茎破裂音 (/t/, /d/) での代替が挙げられているが、その他の音素を歯摩擦音 (/θ/, /ð/) の代替としている地域では、英語によるコミュニケーションの際に注意が必要となる。

Deterding (2010) では標準中国語（普通話）の18歳から21歳の母語話者13人を対象とした歯摩擦音の発音について調査している。有声音の /ð/ を語頭に含む単語 (that, than, then) で常に /d/ または時々 /d/ で発音した学習者が4名、5名は /z/ と /ð/ を織り交ぜて発音し、4名は常に /ð/ と発音したと報告している。語中に /ð/ を含む単語 (mother, brother) では、6名が /d/ で、3名が /z/ で発音する傾向にあった。また無声音の歯摩擦音 /θ/ は、語頭、語末とも /s/ で発音される傾向が強い。

Kirkpatrick (2010) では香港の大学にて広東語母語話者15名に対する無声歯摩擦音の調査（インタビューによる録音）を行っており、特徴的なものとして代替音 /f/ をあげている。語頭に /θ/ がくる語のなかでは /θ/ で発音した学生が多かったが、“think”, “three” において /f/ での代替が顕著にみられ、語中 (something, everything, methods) では /f/ での代替は見られず、語末 (youth, both) では /θ/ の発音は現れず、/f/ での代替が起こっている。

日本語母語話者の発音が英語の発音習得の際に与える影響や、実際に習得困難である英語の音素についての議論も、その教授法も含めて数多くなされているが、LFC に視点をおいた研究はまだ少ない。LFC を基にした日本語母語話者を対象とした発音調査としては、内田 (2008) が代替音の傾向と、それを踏まえた教授法について報告している。日本語に存在しない音素を抽出し、日本語母語話者が多くの場合使用する代替音のうち英母語話者が受容可能なものは除外したうえで、日本語母語話者が訓練すべき子音についてリスト化している。その中には歯摩擦音 /θ/, /ð/ も含まれており、「日本語からの代替音では最小対立（ミニマルペア）を明確に示すことができずコミュニケーションの障害となる可能性があるもの」と位置づけている。

実際、歯摩擦音の習得が日本の教育現場でどのような現状であるかを手島 (2010) では「/θ/, /ð/ も特に指導されずに、/s/, /z/ で代用されているか、指導される場合には『舌尖を上下の歯で軽く噛んで』といった不正確で不適切な指示が行われている。thick と sick が同音になる」と指摘している。

5. 日本語母語話者の歯摩擦音の代替音素

5.1. 調査の目的

上記の背景をもとに、本研究では日本人英語学習者の歯摩擦音の発音について、調査をする。調査対象としての音素に歯摩擦音を選択したのは、多くの研究において「日本人が困難を感じる英語の発音」であるとされているためである。その一方で、先

に述べた LFC では歯摩擦音は他の音に置き換えてもほぼ問題ないとされている。英語話者が歯摩擦音の代替として用いる主なものに歯茎破裂音 /t/, /d/ が挙げられるが、日本語母語話者が歯摩擦音の代替とする音はこの限りではない。出現環境に応じて /s/, /z/, /ʃ/ が代替音素となることが考えられる。LFC を考えていく上で、まずは日本語母語話者がどのようなストラテジーを歯摩擦音に用いているかを明らかにする。将来的に Expanding Circle における日本人英語学習者の発音の intelligibility に繋がっていくことを想定している。

5.2 調査の対象

被験者は都内の大学に通う 18 歳から 22 歳の学生 12 名である。全員が日本語を母語とし、半期の英語音声学の授業の受講者である。この講座の対象者は中学・高校と十分な発音教育を受けておらず、英語の発音に不安がある学生となっており、シラバスに沿って第 1 回目の授業時に「発音テスト」を行った。

5.3. 調査の方法

録音課題は三種類で、一つ目は自由発話での自己紹介、後のふたつは二種類の文章を読ませるといものである。この二種類の文章については以下の二つの文章から一部を引用した。ひとつは Deterding (2010) で使用されていた “The North Wind and the Sun” (IPA, 1999) からであり、もう一方は “Manual of American English Pronunciation” の付録である “Diagnostic Passage” からである。練習時間は設けず、その場で録音し提出するものとした。半期の授業の第 1 回目で課題提出が行われており、この時点で特定の音素、音韻的特徴についての指導は行われていない。

回収した録音課題のうち、歯摩擦音を含む単語を有声音・無声音、出現環境別 (語頭、語中、語末) に分類し、それぞれ学習者がどの音で発音したか、その出現回数を調査した。

5.4. 結果と考察

調査結果は表 1 のようになった。有声音で語頭にくるものから順に結果を見ていくと、出現頻度が最も高かった “the” については歯茎摩擦音 /z/ を代替母音とする場合が 34 回中 21 回と多いことがわかる。歯摩擦音 /ð/ は、主に発話速度が遅い場合に確認された。また LFC で容認されている歯茎破裂音 /d/ での代替も 4 回確認された。続く “that”, “than”, “then”, “they” でも歯摩擦音 /ð/ よりも歯茎摩擦音 /z/ の発音の方が多く見受けられた。

語頭の “this” でのみ歯茎破裂音 /d/ での代替が際立って多かった。出現環境が語頭のものなかでは “this” のみが後続の母音が /i/ であることがわかり、後続の母音の影響と考えられる。LFC では /ð/ の代替音素として /d/ を想定していることから、“this” については非母語話者の英語としては許容範囲であることが考えられる。

語中の歯摩擦音 /ð/ の発音においても /z/ での代用が顕著であった。また “clothing” では /s/ での代替を行うものが 5 名いたが、これはそもそも “clothing” における歯摩

擦音の発音が無声音であるとの誤認から生じている可能性が高い。

表1. 日本語母語話者の歯摩擦音の発音

			歯摩擦音	歯茎破裂音	歯茎摩擦音	その他
有声音	語頭		/ð/	/d/	/z/	
		the	9	4	21	
		that	4	1	5	
		than	4		8	
		then	2	1	9	
		they	5		6	
	this	3	18	1	/s/ 1	
	語中	other	5		7	
		another	3		9	
		clothing	2		5	/s/ 5
mother		1				
語末	with			1		
無声音	語頭		/θ/	/t/	/s/	
		think	3	1	8	
		thank	3			
	語中	something			1	
	語末	north	1		11	

語末の歯摩擦音は課題文の英語にそのような単語が含まれていなかったため、自由発話における1回のみでの出現となったが、その唯一の語“with”も /z/ で発音されており、いままでの傾向から /z/ の代用が多用されていることを考えれば、語末の歯摩擦音も日本語母語話者の多くが /z/ を用いることが推測できる。

次に無声歯摩擦音 /θ/ の結果についてであるが、語頭の“think”では /s/ での代替が多く見られた。また語中の“something”および語末の“north”でも /s/ の発音を用いること傾向があることから、日本語母語話者が無声歯摩擦音 /θ/ の発音の際に /s/ と発音しがちであることがわかる。

また有声音と無声音との大きな差異についてだが、有聲歯摩擦音では後続の母音が /i/ である場合には、それ以外の母音が続く場合と異なり /d/ による代用が起こっていた。この規則がそのまま無声歯摩擦音 /θ/ にも当てはまるとすれば、“think”や“something”における歯摩擦音の発音は /t/ で代用されるはずである。これは日本語母語話者の歯摩擦音の音認識における特徴的な点であると考えられる。

6. 結論と今後の発音教育の課題

今回の調査では、ELF という視点から日本人学習者の歯摩擦音の特徴を明らかにするという試みであった。今後、日本語母語話者が英語を使用する際に Expanding Circle での英語によるコミュニケーションは無視できないものとなってくるであろう。現在、日本における英語教育はまだまだ英語母語話者（特にアメリカ英語）中心であることは否定できない。だが、内田（2008）では日本の大学または短期大学を卒業し就職した者に対するアンケート調査で、卒業後に業務で英語を使用する機会がある者のうち、実に87%が非英語母語話者とのコミュニケーションにおいて英語を

共通語として用いていると述べられている。このような現実を見据えた外国語教育が、今後の日本の教育現場での課題となってくるであろう。日本語母語話者における LFC に基づいた発音研究の成果は、日本における英語教育はもちろん、その他の外国語教育、ひいては日本語を母語としない国における LFC 研究の現場にも有益なものとなると考えている。

今回の調査では被験者数が限られており (N=12)、標本数の少なさから結果の一般化は難しいと考えられるが、日本語母語話者が英語の発音習得において困難を感じていることが明らかとなった。なぜ日本語母語話者が英語の発音に困難を感じるのか、なぜ「カタカナ発音」が主流となっているのかについて、手島 (2011) では、4つの理由を挙げている。まず、「外国語」に割り当てられた時間が少なく、生徒が英語を話す時間を確保すると発音指導をする時間がなくなり、教師は悩んだ末に前者 (カタカナ英語) を選択するのである。二つ目は「英語で話してくれるだけでよしとする」というもので、英語の授業では口を開いてさえくれたらそれだけで十分であり、立ち入った発音指導をするところまでいかないという現実である。三つ目は「とりたてて発音指導する必要はない」という意識があり、日本語訛りのカタカナ発音でもよいとしてしまうことである。これについては、ELF をどう捉えるか、World Englishes の多様性をどこまで認めるのかという問題に関わってくるので、発音教育の理念を説いたことばと共に後述する。四つ目が最も問題であり、「発音の指導法がわからない」というものである。英語音声学は英語の教員免許を取る際の必修科目とはなっておらず、教員自身が英語の発音指導を受けたこともなければ音声学を学んだ経験がないため、発音指導ができないのである。日本の外国語教育制度が抱える今後の課題であると考えている。

教育制度の問題とともに、今後 ELF をどのように捉えていくか、外国語の発音はどうあるべきかという問題についても議論する必要がある。日本の外国語教育における発音が母語話者偏重の傾向にあることは否定できないが、実際それがどのような問題を引き起こしているのか、そもそもそれが問題であるのかという点についてである。藤原 (2010) では初級学習者が英語の発音に対してどのような意識を持っているかを因子分析により調査したが、「発音が悪いと人前で英語を話すのが恥ずかしい」、「自分の発音が正しいかどうか自信がない」、「海外に行かなければ英語の発音は上手にならないと思う」、「どんなに英語の知識や能力がある人でも発音が悪いと英語ができない印象を覚える」など、英語の発音に対する苦悩と不安がこみまみられた。このような意識が、学習への原動力となれば良いが、苦手意識を引き起こし英語嫌いになる可能性も否定できない。ELF や World Englishes という概念があることを学習者に周知することで、発音に対する不安を和らげ自信に繋げることは可能であると考えている。しかし、清水 (2011) が指摘するように、「『最低限通じる』ための発音教育を受けた学習者が、その後に英語母語話者との間での英語使用が必要になったり、英語母語話者に近い発音が必要とされるようになったりした場合、音素対立のより少ない体系から、より多い体系への移行はかなりの困難を伴う」ことは容易に想像がつく。

現時点での LFC の項目はかなり限定的であり、清水 (2011) が指摘するように母

音の発音についての具体性が示されていないこと、また non-core とされる要素（弱形の使用・語強勢の配置・ピッチの上下など）が実際にコミュニケーションの際に与える影響については今後さらなる検証が求められている。またその際には、学習者の発音の指標を表す概念としての「明瞭性 (intelligibility)」をどう評定するかという問題もある。大和 (2012) は近年の研究で「明瞭性 (intelligibility)」と「理解性 (comprehensibility)」が区別されることなく使用されている現状についての問題点を指摘している。研究・調査においては「明瞭性 (intelligibility)」という概念を明確に提示し、その構成概念に対し適切に操作的定義が設定されることが求められる。

現時点で外国語の発音習得は何を目指すべきかそしてどうあるべきかの答えとしては、母語話者の発音を目標とするのが良いのではないか。これは母語話者の発音しか認めないという考え方とは一線を画す。野間 (2014) が指摘するように、最初から日本語式発音でやるという構えの発音と母語話者の発音を目指し努力し、結果として日本語のアクセントが残るのとはまったく違うのである。「アメリカ英語」や「イギリス英語」の音声モデルは教材として世の中に出回っていることから手に入りやすい。LFC という概念は存在するが確立していないため、そのための教材は現時点ではまだ手に入らない。

個々の学習者が目指す外国語のゴールは様々であり、発音もその目的に合った目標でいいかもしれないが、やはり言語習得は Wells (2008) が述べている「個人的には」という言葉から始まる一節、「私自身、言語習得における最終的な目標は母語話者のようになることであり、それ自体難しいことであることは認識している。しかし、それでもあきらめることはないし、自分の学生にも同じように高い理想を持って欲しい」(p. 102)、この言葉に尽きるのではないか。

今回の研究結果を基に、今後は日本語母語話者の英語の発音における /θ/、/ð/ の intelligibility について、英語母語話者と非母語話者がどれだけ許容するかについて調査していきたい。また非母語話者の英語の発音については、聞き手が母語話者である方が intelligible (理解される) であるとされるが、つまり ELF の「明瞭性 (intelligibility)」は Inner Circle で最も高く、以下 Outer Circle, Expanding Circle の順であると仮定する場合、Inner Circle で理解されない発音はそれ以外の Circle でも理解され得ないと推測できる。しかし、その例外として「聞き手が母語を同じとする場合」が考えられる。ELF では母語の accent (なまり) の保持が許容されているが、この accent が Inner Circle と「聞き手が母語を同じとする場合」とで、「明瞭性 (intelligibility)」にどのように影響するかについても研究をすすめていく。最終的には ELF として /θ/、/ð/ の「明瞭性 (intelligibility)」を維持するための日本語母語話者にとって効果的な指導法を提示することで、研究結果を教育現場、社会に還元していくことを目指していく。

参考文献

- Barrera, Pardo D. (2004). Can pronunciation be taught? A review of research and implications for teaching. *Revista Alicantina de Estudios Ingleses* 17, pp.31-44
- Boku, M. (1998). Student-centered pronunciation practice: More than “right” or “light”. *The Language Teacher Online* 22, 10.

- Cruttenden, A. (2008). *Gimson's Pronunciation of English* (7th). Routledge.
- Deterding (2010). ELF-based Pronunciation Teaching in China. *Chinese Journal of Applied Linguistics*, Vol. 33, No. 6. pp. 3-15
- Eskenazi, M. (1999). Using automatic speech processing for foreign language pronunciation tutoring: Some issues and a prototype. *Language Learning & Technology* 2, 2: pp. 62-76
- Jenkins, J. (2000). *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2007). *English as a lingua franca: Attitude and identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Kashiwagi, A., Snyder, M. (2010). Speech Characteristics of Japanese Speakers Affecting American and Japanese Listener Evaluations. *Teachers College, Columbia University Working Papers in TESOL & Applied Linguistics*, Vol. 10, No. 1 pp.1-14
- Kashiwagi, A., Snyder, M. (2014). Intelligibility of Japanese College Freshmen as Listened to by Native and Nonnative Listeners. *JACET JOURNAL* (58), pp. 39-56
- Kirkpatrick, A. (2007). *World Englishes Paperback with Audio CD: Implications for International Communication and English Language Teaching*. Cambridge University Press
- Kirkpatrick, A. (2010). *English as a Lingua Franca in ASEAN: A Multilingual Model*. Hong Kong University Press.
- Lambacher, Stephen, G., Martens, William L., Kakehi, K., Marasinghe, Chandrajith A., Molholt, G. (2005). The effect of identification training on the identification and production of American English vowels by native speakers of Japanese. *Applied Psycholinguistics* 26, pp. 227-247
- Otlowski, M. (1998). Pronunciation: What are the expectations? *The Internet TESOL Journal* 4, 1.
- Prator, C. H., Robinett, B. W. (1984). *Manual of American English Pronunciation*. Harcourt College Pub
- Setter, J. and Jenkins, J. (2005). Pronunciation. *Language Teaching* 38, 1: pp. 1-17.
- Wei, M. (2006). A Literature Review on Strategies for Teaching Pronunciation. (ERIC Document Reproduction Service No. ED491566)
- Wells, J. C. (2008). Goals in Teaching English Pronunciation. *English Pronunciation Models: A Changing Scene*. PETER LANG
- 内田浩樹 (2008) 日本語母語話者が訓練すべき英語の音素—発音訓練が聴解分野にもたらす効果—『鳥取環境大学紀要』第6号 pp. 39-48
- 清水 (2011) 国際語としての英語と発音教育『音声研究』第15巻第1号 pp. 44-62
- 手島良 (2011) 日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について—発音指導の現状と課題—『音声研究』第15巻第1号 pp. 31-43
- 野間秀樹 (2014) 『韓国語をいかに学ぶか—日本語話者のために』平凡社新書
- 藤原愛 (2010) 日本人英語学習者の発音習得に対知るビリーフ『育英短期大学研究紀要』第30号 pp. 37-46
- 藤原愛 (2014) 日本における外国語教育を背景とした大学生の異文化理解『育英短期大学研究紀要』第31号 pp. 15-27
- 大和知史 (2012) L2 speech 研究における発音の「明瞭性」の取り扱い—明瞭な評定のために—『外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会2011年度報告論集』 pp. 41-49